

2021年10月24日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書1章32～39節

説教題：心安んじて生きて行く支え

「お便り」にも書いたのですが、7日の深夜、激痛に襲われ、我慢できなくて救急病院に行きました。先生方が色々な検査をして下さり「虫垂炎に間違いない、腹膜炎になる前に手術した方が良い」ということになり、8日の未明に入院し、手術を受けました。術後は、身動きができず、術創部は痛く、熱はあり、「本当に良くなるのだろうか」と思う状態でした。それが、日が経つにつれてどんどん良くなるのです。「我、包帯す、神、癒し給う」という、ある先生のメッセージで聞いた「近代外科医の創始者」と言われるアンブロワーズ・ペレの言葉を思いました。担当医の先生も良い手術をして下さり、看護師の方々も細やかにお世話をして下さいました。しかし、日々癒され、良くなって行く、「これは神様の御業だ」と実感しました。その意味で、皆様の主に在るご心配、お祈りが、本当にありがたかったのです。祈られて在ることの幸いを感謝致しました。

今朝の箇所は「祈り」がテーマです。内容と適用と2つ、お話しします。

### 1：内容～御心を歩むために主イエスは祈られた

イエス様は、最初の弟子達を招かれた後、カペナウムを中心とした宣教活動を始められました。「1章21～31節」は、イエス様が安息日に会堂で教えを為されたこと、悪霊に憑かれていた男から悪霊を追い出されたこと、その後、会堂を出てペテロの家でペテロの姑を癒されたこと、それら一連の出来事を伝えます。当時の律法では、安息日に人を癒しても、癒されても、いけませんでした。また人のような重いものを運んでもいけませんでした。それでイエス様の癒しを見た人々は—(特に病気の家族を抱えている人々は)—一家族をイエス様の所に連れて行きたくても、安息日には連れて行くことが出来ませんでした。ユダヤの1日は日没で終わります。32節に「日が沈むと…」とあるのは、「安息日が終わって次の日が始まる」という意味です。「癒されても良い日」が始まったのです。それでペテロの家の前には、多くの病人が連れて来られたのです。イエス様はその人々を癒されました。その癒しには、かなりの時間が掛かったに違いありません。後に長血を患った女を癒される場面で、イエス様は「私から力が出て行ったのを感じたのだ」(ルカ 8:46)と言っておられます。この場面でも、イエス様は「癒し」を為さるために霊的な力を使い果たされたはずですが、だからこそ、イエス様は、次の日の「朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈り」(35)られたのです。

イエス様は「祈り—(神との交わり)—無しにはやって行けない」ということを良く知っておられたのです。ヘンリ・ナーウエンというカトリックの神学者が、次のようなことを言っています。「…活動について声高に語る言葉の間に挟まった、静けさが支配するこの文節を読めば読むほど、イエスの働きの秘訣がどこにあったかに気づかされます。それは、夜が明ける前、朝早い時間に祈りに出かけたあの人里離れた所に隠されていたのです」(ヘンリ・ナーウエン)。(今日はナーウエンの言葉を特に取り上げます)。私達も一生懸命生きています。その中に色々な気遣いがあります。配慮があります。業があります。色々な形で自分の内にあるものを外に出しています。イエス様でさえ「神様との1対1の交わり」の中で神様から力を頂くこと無しにはやって行けなかったとするなら、私達はどれだけそれが必要でしょうか。ある聖書学者は言いました。「祈らないことは、私達の資源に神を加える可能性を無視する信じ難いほどの愚かな罪である」。宗教改革者ルターは言いました。「私はあまりにも忙しいので、1日3時間は祈らなければならない」。もちろん祈らなくても生きて行けます。しかし、生き生きとした信仰の命を生きること、神の命に生かされることは、できないのではないのでしょうか。

さてしかし、私達は「このイエス様の祈り」について、もう一步踏み込んで考える必要があると思

います。と言うのは34節に「イエスは、さまざまの病気にかかっている多くの人をいやし、また多くの悪霊を追い出された。そして悪霊どもがものを言うのをお許しにならなかった。彼らがイエスをよく知っていたからである」(34)とあり、それに続いて「イエス様の祈り」の記事が書かれているのです。ということは、「悪霊どもがものを言うのをお許しにならなかった」ということと「イエス様の祈り」には関係があるのではないのでしょうか。イエス様は、単に疲れた魂に、霊に、精神に、神の癒しと神の力を頂くために祈られたのではないのだと思います。では、何を祈り求められたのでしょうか。

まず「悪霊どもがものを言うのをお許しにならなかった」(34)ということですが、悪霊であれ何であれ、例えば、悪霊に憑かれた人が神がかりのようになって「お前は神の聖者だ」と言えば、人々の注目が集まり、それだけ伝道し易くなるはずですが、しかし「福音書」のイエス様は「ご自分が神からの救い主である」ということを極力隠そうとされるのです。それは…。イエス様は、確かに神の許から人を救うために来られた方です。しかし、イエス様が救い主であるというのは、私達の日々の生活の様々な問題から私達を救って下さる方である、ということでもあります。それは、私達が神様との関係に入ることによって、初めて積極的な意味で現実となる救いです。何より、私達を永遠のいのちに導いて行くのは、神との個人的な関係です。だからイエスが、ご自分の使命として果たそうとされたのは、人々を神との関係に引き入れることです。そしてそれは、最終的には、ご自身の十字架によって成し遂げられるのです。

そうすると、イエス様がここで何を祈っておられたのか。36～37節に「シモンとその仲間は、イエスを追って来て、彼を見つけ、『みんながあなたを捜しております』と言った」(36～37)とあります。前夜の癒しの評判がますます広まり、人々がイエス様のところに押し寄せているということでしょう。そうすると、人間的にはどうでしょうか。人々に期待されていること、人々が大きな関心を持って見つめていることに、心が揺らされるのではないのでしょうか。人々の賞賛は、私達の虚栄心をくすぐり、私達を動かし始めます。イエス様にとっての戦いは、ご自分の評判が高まれば高まるほど、十字架が難しくなるということです。言い方は相応しくないかも知れませんが、イエス様の人間としての部分が「このまま力ある説教をして、力ある業をすれば、人々の心を神に向けることが—(人々を神と結びつけることが)—できるのではないか。何も十字架という悲惨の極みのようなことを身に受けなくても良いのではないか」と思い始めることです。そうやって神の御心から逸れて行くことです。

だからこそ、イエスは祈られたのです。祈りの中で神の御前に立ち、自らの歩むべき道を確認し、自らを誘惑して来るものを見据えて、それに打つ勝つ力を求めて祈られたのです。それが、ここでの祈りの大きな部分だったと思います。「主の祈り」の中でイエス様が教えて下さった「我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」(マタイ 6:13)という祈りは、他ならぬイエスご自身がなされた祈りだったかも知れません。だから「寂しい所」での祈りの結果、イエス様は、神の聖者に祭り上げられそうな場所から離れて、「さあ、近くの別の村里へ行こう。そこにも福音を知らせよう。わたしは、そのために出て来たのだから」(38)と言われたのです。

## 2. 信仰生活への適応～御心に適う信仰生活をするために祈る

この個所から何を学ぶことができるのでしょうか。もちろんそれは「祈る」ことです。CS ルイスは言いました。「神は、人間という機械を、神ご自身を燃料として走るように設計なさったのである」(CS ルイス)。これは「人は神に結びつかなければならない」ということを説いた言葉ですが、同時に「結びつき続けることの必要」が語られている言葉だと思えます。私達は、神様に祈る中で信仰者として生きることが出来るのです。「問題の中で、試練の中で、祈ることができる」ということはどんなに幸いなことでしょうか。また、初めに申し上げたように、祈られて在る、ということは、どんなに感謝

なことでしょうか。「詩篇」に次の御言葉があります。「わたしたちの先祖はあなたに依り頼み、依り頼んで、救われて来た。助けを求めてあなたに叫び、救い出され、あなたに依り頼んで、裏切られたことはない」(詩篇 22 篇 5～6 節・新共同訳)。「あなたに依り頼んで、裏切られたことはない」、例えばこの御言葉を握って祈る時、私達にとって、祈ること自体がすでに希望です。

しかし、ある神学者は言いました。「人は困難の時には1万の祈りを捧げるが、繁栄の中ではその祈りは1つである」。「困難の中で祈ることが出来る」、それは素晴らしいことです。しかし、祈りというものが、もしそれだけなら、困難がなければ祈らないことになります。実際、私達の信仰は、逆境の中でもへこみますが、それ以上に順境の中で弱って行くのではないのでしょうか。祈らなくなる、聖書を読まなくなる、「それでもやって行ける」と思う。そうやって私達の霊性は、知らず知らずの内に弱って行く、知らず知らずの内に神から離れて行く、ということがあるのではないのでしょうか。問題の解決や人生の祝福を願い求めることは、祈りの重要な要素です。いや一番大きな部分でしょう。私達にはそれぞれ、課題が、切なる願いがあります。しかし、それだけが祈りの目的ではありません。

では、祈りの他の目的とは何でしょうか。それは、ここのイエス様の祈りが教えます。ある牧師が次のように言っておられます。「キリストから離れても、むろん、いろいろなことが出来ます。面白いこと、自分を喜ばせること、なんだってすることが出来ます。しかし神の御心にかなうことは何一つ出来ないのです…」(小島誠志)。「祈り無しには—(神に導きを求め、神の導きの中を歩むことなしには)—神に喜ばれる信仰生活はできない」と言うのです。なぜ、できないのか。私達は基本的に、神様ではなく、自分を主人公にして生きようとするのではないのでしょうか。言い換えると「神がどう思われるか」という神様の視点を抜きにして考えてしまう、ということがあるのではないのでしょうか。

私はある時、「失敗した」と思い悩んで鬱的になって行ったことがあります。その時に1人の先生が私に言われました。「神様には『先生がしたこと—(何をしたかということ)』よりも『先生そのもの』が大切なのですよ」。私にはその視点がありませんでした。神様を抜きにして、「自分だけの世界」で物事を見ていた傲慢があったのです。神への祈りが足りなかった、ということも言えます。ヘンリ・ナーウエンは次のように言っています。(分かり易く言い換えます)。「祈りを通して神と交わって行く中にイエス様の生きる根拠(土台)があったし、祈りを通して神の御心に触れるところに、心を安んじて、しかも回りに左右されずに自由に生きて行くその支えがあった」(ヘンリ・ナーウエン)。私達も、神への祈り、神との交わりが、生活の、生き方の、土台であるべきだと思うのです。

祈りの大切な目的は、神に生かされて在ることを確認して、「神様に喜ばれる生き方ができるように」と願い求めることではないのでしょうか。そのように、神を自分の生きる現実の中にお招きすること無しには、私達は「神の御心に適う生き方—(神の愛に応える生き方)」をすることは難しいのではないのでしょうか。私は森繁さんの話を思い出します。(何度もお話しますが…)。彼はアメリカで信仰を持ち、「日本人に伝道したい」と思って、日本で教会を始めたのです。しかし、アメリカ人の奥様は日本の生活に馴染めなくて、だんだん落ち込んで行かれたのです。彼は家族のためにハワイに住むのです。しかし、仕事がない。ようやく見つけたのがマカデミアン・ナッツの農場で草を刈る仕事でした。ずぶ濡れになりながら働きました。彼は神に叫んだのです。「神様、私はここで何をやっているのでしょうか。伝道もできません。伝道ができなければ生きていく甲斐がありません」。彼は3か月、神様と祈りの格闘するのですが、その中で導かれるのです。そしてやがて「神様、もしあなたが私にさせたいことが、ここで家族の面倒を見ることだったら、それをあなたがさせたいのなら、私はやります。一生でもやります」。そう祈るようになるのです。そこから彼は、生活のことも導かれ、そして色々な形で神の御業に用いられるようになるのです。祈りが、彼の人生を、生活を、奉仕を導いたのです。(ご本人に確認したわけではありませんが、私はそのように理解しています)。

私達も、日毎に祈り、日毎に神との関係を受け取り直すことを通して、本当に「神との生きた交わりを土台とした信仰生活」を造って行ければ、と願います。そうでなければ、結局は信仰生活が、神に根ざしたものでなく、人間的なものに支配されて行くことになるのではないのでしょうか。そして私達を深いところから生かす神の力や愛を経験することができずに、靈的に枯れて行くのではないのでしょうか。

私の好きな話があります。三浦綾子さんが「氷点」を書いている時の話です。12月31日の締め切り日が迫って来て、原稿が間に合わないかも知れないという状況になりました。綾子さんは夫の光世さんに「恒例になっている自宅を開放しての子供クリスマス今年だけは休めないか」と頼むのです。光世さんの返事は「神の喜ばれることをして落ちるような小説なら書かなくても良い」でした。しかし、光世さんの言葉の背後には「祈り求めることは、すでになえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ 11:24)というイエス様の言葉があったのです。彼は「入選するように」と祈り求め、「それが成る」と信じることができたのです。祈りがあったのです。だから言えた信仰の言葉だったのです。そのように、祈りが私達を信仰者として生かすのではないのでしょうか。

だから私達も祈りましょう。そして願わくは、少しでも神様に喜ばれる信仰生活を歩ませて頂きましょう。

### 最後に

ある牧師が亡くなる前に言われたそうです。「もう一度、神が私をこの地上に生かして下さるなら、私が色々なことに使った時間を、その時は祈りのために使うだろう」。天国に行った時、私達は初めて、祈りの本当の重大さを知るのではないのでしょうか。それを思うからこそ、祈りつつ、天に向かって良い信仰生活を紡いで行きたいと願います。